

泉井久之助の言語研究について¹ —ソシュール受容とフンボルト受容を中心に—

李 長波

0. はじめに

二十世紀の言語学史に果たしたソシュールの役割を考えれば、二十世紀の言語学史はソシュールに始まったといってもけっして過言ではない。そしてもう一つ忘れてならないのは、彼の主著『一般言語学原論』は1926年に刊行されたが、わずか二年後の1928年にすでに他の諸外国にさきがけて、日本語版が小林英夫訳で翻訳、出版されたことである。訳者小林英夫の確かな見識、その先見の明は二十世紀日本の言語学の針路を決定した感があり、永く高く評価されるであろう。しかし、二十世紀日本の言語学全体を考えると、我々はさらに小林英夫一個人だけでなく、さらに同時代の他の言語学者のソシュール受容に目を向けなければならない。特に言語学のバイブルの名に相応しい『一般言語学原論』についての理解、ひいては批判が注目される所以である。本稿は日本語訳『一般言語学原論』が出た直後に書かれた泉井久之助の書評をてがかりに、泉井久之助の1928年同時のソシュール受容とその後の言語研究の展開について概観するものである。

1. 泉井久之助のソシュール受容

言語学者泉井久之助の言語研究に於いて、ソシュールの受容はけっして一過的なことではなく、濃淡の差こそあれ、その研究の全体を通じてソシュールの影を求めることができる²。ここに言うところのソシュール受容は、「小林英夫氏譯 ソツスユール言語學原論を讀みて（上・下）」を基本資料として用いる限りにおいて、泉井久之助のごく初期のものに限られよう。しかし、そこにはすでにいくつかの点に於いて泉井久之助の

¹本稿は平成15年6月14日、類型学研究会において発表した内容をもとに書いたものである。研究会の席で、山口巖京都大学名誉教授よりたいへん貴重なコメントをいただいたことは本稿をまとめる原動力となった。なお、書評の存在については赤井規晃氏にご教示いただいた。記して感謝を申し上げたい。

²例えば『言語の研究』（1956年、有信堂）の序文において、泉井久之助は、先の引用に続いて、「通時と共時は、私にとっても有用な作業原理である。この意味では、私もまた、一応異なる意味で、ソツスユールの徒といえるであろう」（2-3頁）と断っている。

言語研究の全体に通底するものが早くも現れたこと、そしてそれが50年代、60年代においてより完成したものとして理論化の域に達するという意味において極めて有意義な資料である³。

付録一でご覧のとおり、この書評はかなりの長文である。その内容の全部を論じることは紙幅の都合よりも、筆者には荷が勝ちすぎる。そこで、この書評の中から特に次の二点を取り上げることにしたい。

一、ソシュールの原著の問題点の指摘

二、寺田寅彦への批判

ソシュールの原著『一般言語学原論』の問題点に対する泉井久之助の指摘の最も重要な一点は、ソシュールの言語研究には歴史的研究が欠如していることへの指摘である。

(前略) 斯くの如く定義された言語は時に従つて分てば古代語があり近代語があり死語があり生語がある。所に従つて言へば自由語^{マテ}があり他国語があり方言がある。社会に於ては標準語があり通用語があり官用語があり卑語隠語、乃至特殊階級、特殊職業団体の言語がある。しかし本来の意味の言語学の対象とするのはその何れでもあり、またその何れのみでもない。「言語学は言語そのものをそのものとして研究する」からである。言語を研究するに、古代にしる現代にしる時の縦軸の一点に空間の横軸を引いてこれに現れる言語現象を研究する事もあれば、時の縦軸に従つて流れ下る同一現象の變遷を調べる事もある。前の方法をソツスユールは共時言語学と稱し、後者を通時言語学と稱する。文法は同一時期の言語現象の体系的總和である。文法には類推作用は働いても語學者的語原意識は働かない。古代から承け継いだ言語現象も現代に於て創造された現象もそれが一つの時代の用語である限りは、語る人は同一の取扱を與へる。この取扱が文法である。故にソツスユールには時の軸をビヴオとする歴史的文献といふものは存在しない。

ソシュールにおいて、「ラング」と「共時」によって言語の構造的な側面が強調されていたことはひとりジュネーブ学派にとどまらず、実際二十世紀の言語学の方向を決定したという意味では、二十世紀の言語学は「ラング」と「パロール」、「通時」と「共時」という二組の対概念の峻別によってその礎が据えられたと言ってよい。わけても「ラング」と「共時」の概念によって言語の「構造」への認識が促され、さまざまなレベルにおいて言語の構造的解明が試みられる結果となったのは周知のことに属する。これは、

³ 書評本文は付録1を参照されたい。

とかく系統関係に収束しがちだった十九世紀言語学の「歴史」に対する「構造」の勝利といってもよい。しかし、この勝利の蔭には「意味」を拒否するあまり「構造」を骨ばかりの裸の障子のように具象化するものも時折見え隠れしたことは、二十世紀の五十年代からはブルームフィールド、その後のチョムスキー一派がややもすればその誹りを免れがたいと言われる所以もここにある⁴。そうした構造の機械的な理解に訣別して、今や「意味」は再び言語研究の中心に呼び戻されようとしている。が、これとても「歴史」に対するかつての勝者の奢りから完全に抜け出したとは言い難い。意味を抜きにして言語の構造を語ることはできないことは自明の理であろう。それと同時に言語の歴史を抜きにして言語の現在を語ることもできない。この点、泉井久之助はその言語研究の最初から「構造」と「歴史」の両方に対して穏健且つ建設的な態度をとっていたことは、その後の言語学の歴史的な展開に照らしてもとりわけ注目してみたい。もちろん、1928年の時点では、泉井久之助の「歴史」に対する注目はまだまだ対象の持つ歴史的な側面に止まっていたものであった。それを対象としての言語の一側面に止めずに、言語研究の方法として再認識するようになったのは、文献で見ると、二十八年後の1956年に書かれた、『言語の研究』（1956年、有信堂）の序文においてである⁵。

書評に見るように、泉井久之助は、言語の「構造」に止まらず、「歴史」にも十分な注意をもって言語研究を行っていたことは明らかであり、これはその後の研究成果に徴しても明らかである。実際、同書評においても、次に引くように、言語の変化に対する鋭敏な観察と的確な理解が随所伺われている。

時の軸に乗つて下る言語現象は必然的に變化する、しかし同じ地域に住して個人相互の交通の激しい緊密なる言語團體は一團として同一の變化を経験し、或一定の時の後には始め同一の共通語を使用した他の言語團體とは別の變化を経て別の言語状態に到達することになる。方言の發生がこれであり更に分裂して相互の理解が困難不可能となれば別々の言語となる。かかる變化現象には時の要素の外に地理的擴がり関係するから彼は通時言語學から地理言語學を獨立せしめてゐる。しかしソツスユールは地理が何故にこの原因となり得るかについては審かに説く所がない。單に土地を異にただけでは何の差異をも來すことなしとは純理的に考へ得られる所である。大切なのはそれによる社會的要因の相違である。故にメイエは言語現象の社會的方面を特に重要視する。根幹を一にする日本語と琉

⁴ 「言語研究の歴史」（『講座日本語 1 日本語と国語学』、岩波書店、1976年）を参照。

⁵ 詳しくは次節を参照されたい。

球語があれだけ隔つたのも、羅馬帝國に廣まつた同一の拉丁語があれだけの様々な國語となつたのも皆歴史的社會的要因の差異である。

とりわけ、ここでは、「歴史的」とともに、「社会的」要因によって言語の変化、歴史を説明していることに留意しておきたい。これはそのまま寺田寅彦への批判につながるものである⁶。

泉井久之助のソシュール批判の次の一点は、個人的感情意志的方面の研究が欠如しているという指摘である。

言語はまた間投詞を含む如く、言から最も個人的、感情的な方面の表現手段の登録を受けてゐる。個人的感情意志的方面の様々の手段も、表現の最も特殊で激烈な精神病者の場合を除いて、普通無意義に言語を借用して行はれる。已に社會構成分子としての個人は或時は極めて内面的な部分まで社會活動としての言語に頼る如く、概念的な言語には従つてまたこれに應ずるだけの意志感情的方面がある。言語のこの方面の研究は未だソツスユールの爲さざるところであつた。ジュネーヴに於ける彼の弟子シャルル・パリイ氏が、Stylstigue(私はこれに對する適當な譯語を知らない)と稱する研究はこれを對象とする。

先にソシュールが言語の共時態に属するラングを重視するあまり、通時態としての言語の歴史的な側面に対する目配りが必ずしも十分ではなかつたことを述べた。これはほかならぬ通時と共時の峻別のみ説いてその間の關係についての考えが示されていなかったことに起因する。そして、言語をラングとしての構造的な側面に即してとらえることのもう一つの結果として、言語の主観的な、感情的な側面の軽視をもたらす結果となつた。これはかならずしもソシュールの意図するところではないかもしれない。講義ノートを『一般言語学原論』にまとめあげる任にあつた弟子たちのソシュール理解、『一般言語学原論』によって作り上げられたソシュールの理論に対する後の人たちの誤解も、ここでは無視することはできない。我々が『一般言語学原論』のソシュールと、複数の原講義ノートに見る等身大のソシュールを區別することを学んだのは、『一般言語学原論』の初版が出てからかなりの年月を経なければならなかつた。その間、『一般言語学原論』がフランスで幾たびも版を重ねただけでなく、多数の外國語に翻譯されたことは、『一般言語学原論』のソシュールを世界的に広めた、二十世紀言語学の発展に寄与した一面は誠に大きいものがある。が、またその一方で、ソシュール理解の限界を

⁶次節を参照されたい

意識し、克服する機会が長らく得られなかったことは、二十世紀言語学史の事実として今こそ記憶にとどめておきたい。

言語の主観的な、感情的な側面の研究は、そのまま「機能」に対する注目の現れでもある。二十世紀の言語学史を通観すれば、ソシュール以前には、たとえばボードウエン・ド・クルティネが言語の構造と機能に対して鋭い観察の目を向けていたこと、同時代ではロシア・フォルマリズムにおいて言語と文学の関係、やや遅れては、ブラーグ学派において機能主義が声高に主張されたことはあったにもかかわらず、そのいずれも結果的にはソシュールに端を発する構造主義に抗するべくもなく、しかも機械的な構造理解によるそれが長く二十世紀言語学を支配したことを許してしまったのである⁷。これは一面においては大勢がいかに形成されやすく、抗しがたいものであるかを物語っているものであり、これはいずれの世にも人情の常として変わらないものとして、権威の凄まじい威力の前で、自らの健全な精神をまもり、目を曇らさないことがいかに困難であるかを雄弁に、我々に語って聞かせているといえよう。

2. 泉井久之助の寺田寅彦批判

泉井久之助の寺田論文に対する批判に入る前に、ここで寺田寅彦の論文の要旨を紹介しておかなければならない。論文は「比較言語学における統計的研究法の可能性について」と題して、『思想』（昭和三年二月号）に発表したものである。そのなかで、寺田は、「右に挙げた数式によつて代表された理想的過程の内容とその結果とは、又幾分か実際の言語の擴散過程、並に時間的空間的分布の片影を彷彿させる位のものはあるであらうと思はれる。」（7頁）と述べて、物質分子の拡散という空間的伝播と、放射性物質の自然崩壊という時間的変化の二つの軸で、言語の性格あるいは言語の間の系統関係を明らかにできると指摘したのである。

これに対して、泉井久之助の批判は次のとおりである。

カルドオとシヨーが、現在の形を異にしても歴史的には曾ての同形に發したに對して、二つのバツドは歴史的の手續を以てすれば、別々の源に發して別々の音韻變化を行ひつつ偶然同じ形に落合つたのである。故に我々は單なる音の似寄りを以て言語比較の材料とする事は出來ぬ。比較言語は常に歴史的方法を豫想しなければならぬ。故に先月の思想の寺田寅彦氏の「比較言語學に於ける統計的研究可能性について」の論旨は全く不可能である。

⁷山口巖『パロールの復権』（1999年、ゆまに書房）を参照されたい

われわれはここにおいても泉井久之助は、「比較言語学は常に歴史的方法を豫想しなければならぬ」として、「歴史的方法」を、寺田寅彦の「物理的方法」に対蹠させていることに注目したい。この「歴史的方法」はさらに発展して、ついに「歴史主義」というはっきりした研究方法の主張につながっていくからである⁸。

ちなみに、後にスワデシが、寺田寅彦と同じ発想で、放射性炭素による年代測定法を言語学に応用して、「言語年代学」を提唱したときも、泉井久之助は、厳しい批判を加えている。それでも、言語現象やその変化の歴史的社会的要因を重視すべきだという主張を貫いているのである⁹。

もちろん、書評そのものはあくまでも小林英夫訳『一般言語学原論』についてのものである。寺田寅彦の論文を直接対象としているものではない。しかし、寺田寅彦の論文に対する批判は泉井久之助の言語研究の基本的な態度から自ずから導き出されるものであり、書評においてどうしても言及せざるをえなかったその必然性を、我々は読み取るべきであろう。

3. 泉井久之助の言語研究—「歴史主義」と「エネルギー」

3.1 歴史主義

これまでに見てきたように、書評「小林英夫氏譯 ソツスユール言語学原論を讀みて(上・下)」において泉井久之助が展開した、ソシュール批判と寺田寅彦批判に通じて言えるのは、言語の歴史的、社会的側面の重視である。これがさらに『言語の研究』(1956年)序においては次のように「歴史主義」という、言語研究の方法として完成

⁸なお、山田幸宏『寺田寅彦の言語観』(『寺田寅彦全集』第六巻月報、1-3頁によれば、物質分子の拡散の理論は、言語研究でいう「方言圏論」に当たり、放射性物質の自然崩壊の理論は、「言語年代学」に相当するものであるとして、寅彦は柳田國男の『蝸牛考』(1930)の二年前にこれを発表したというが、単行本『蝸牛考』に先立って、柳田は『人類学雑誌』(四二巻四〜七號、1927年)に「蝸牛考」を連載していたこと、「方言圏論」の名はないものの方言圏論の考えそのものはすでにその連載の時点において完成していたことを考えれば、寺田論文と柳田の『蝸牛考』との関係は一義的に断定できないようである。やはり柴田武(『蝸牛考』解説『蝸牛考』岩波文庫、1980年、225頁)のように、柳田の「方言圏論」とフランス方言地理学との関係に注目すべきであろう。

⁹泉井久之助による言語年代学に対する批判の主な文献は、以下の数点である。

①「数理といわゆる言語年代論の有効性について」『計量國語学』第十三號、1960年6月、1-17,6頁。『言語の構造』(紀伊國屋書店、1967年、153-174頁)に再録される。

②「前號『数理といわゆる言語年代論の有効性について』追記」『計量國語学』第十四號、1960年9月、64-65頁。

③「日本の Swadeshism」『計量國語学』第十六號、1961年4月、1-8頁。『言語の世界』(筑摩書房、1970年、185-193頁)に再録、「放射能半減期の公式とスウォデシユの「言語年代論」—日本の Swadeshism—」(上篇)と改題。

④「日本の Swadeshist」『計量國語学』第十八號、1961年10月、24-32頁。『言語の世界』(筑摩書房、1970年、193-204頁)に再録、「放射能半減期の公式とスウォデシユの「言語年代論」—日本の Swadeshism—」(下篇)と改題。

されることになる。これが泉井久之助の言語研究の基本的な立場の一つである。

私の理解する歴史主義は、「伝統をもって現在に生きるもの」を取り扱う立場である。人間に関するあらゆる現象は、歴史においてその現在がみいだされ、現在においてその歴史がはたらくものでなくてはならない。(中略) 重要なのは、通時と共時の峻別よりも、二つの交錯の闡明であり、要するに「歴史」である。

歴史は、過去から現在を通じて、また、未来にも働きつづけるものでなくてはならない。(『言語の研究』、1～2頁)

ここにおいて展開された「歴史主義」は奇しくもほぼ同じ頃に出版されたエウジェニオ・コセリウ Eugenio Coseriu『うつりゆくこそことばなれ』(初版:一九五八年、日本語訳 一九八一年) と通じ合うものであった。

このように、理論的観点からすれば、ソシュールの二律背反(引用者注:通時態と共時態との峻別)は、根本的な意味において、ことばをエネルギーとして見ることによってのみ、言いかえれば、変化というものをたんにすでに与えられた体系の模様替えとしてではなく、体系の絶え間ない構築として理解することによってのみ超えることができる。(かめいたかし、田中克彦訳『うつりゆくこそことばなれ』、221～222頁)

1926年にソシュールの『一般言語学原論』が初めて世に出て以来、「通時」と「共時」、「ラング」と「パロール」の峻別に単純に組しようとはせずに、しかも同じくヴィルヘルム・フォン・フンボルト Wilhelm von Humboldt を祖述しつつ、それを克服しようとする東西二人の言語学者がほぼ時を同じくして、同じ認識に達したことは興味深い¹⁰。

このように、通時と共時の峻別よりも、両者が交錯するところの意味の種々相の究明を重視する立場、言語の歴史においてその現在を見いだし、言語の現在においてその歴史の働きを見るという立場は、言い換えれば、言語の在り方は第一義的には歴史的なものであること、所謂「共時態」はあくまで「通時態」に属するものの一つの「相」に過ぎず、両者の関係は決してその逆ではないことであろう。こうした「歴史主義」の立場には、我々にとって今なお傾聴すべきものがある。人間の精神とそのエネルギーに最も始源的な根拠をもつわれわれの言語は、主観的な内的現象であると同時に、優れて歴史

¹⁰エウジェニオ・コセリウによれば、「本書 — その中核は一九五五年にものされ、一九五六年から一九五七年にかけて増補された — は一九五八年にモンテヴィデオではじめて公けにされた」(『第二版の序』)。そして、一九七三年に第二版が作られたという。因みに、日本語訳はこの第二版に基づく。

的な現象であり、要するにエネルギーだからである。

これまで見てきた、「歴史主義」と同じく泉井久之助の言語研究を通底するもう一つの重要な立場は、「言語はエルゴンではなく、エネルギーである」というその言語観である。これはいうまでもなくフンボルトの影響によるものである。

3.2 泉井久之助のフンボルト受容

3.2.1 1928年頃のフンボルト受容¹¹

『言語研究とフンボルト』序言』によれば、泉井久之助とフンボルトとの出会いはすでに京都大学文学部言語学科在学中に遡る。それには特に哲学の京都学派との接触がきっかけであったようである。それを泉井久之助は次のように回想する。

当時（引用者注：西哲叢書『フンボルト』を執筆していたころ）は戦後の一時期と異なって、諸学のうちでも哲学が特に重く見られていた時代である。そして西田幾多郎・田辺元その他の諸教授を擁する京大哲学科は、日本におけるその中心的な存在と考えられていた。この哲学科を中心とする若手の俊秀たちと弘文堂との間に、故 田辺元先生を監修者として一連の『西哲叢書』を刊行する企画が成立したとき、在学中からこれらの諸先輩と親しくしていた部外の私も、それに一枚、加わるようになった。それには哲学の服部英次郎さんの親切なすすめもある。そして出来たのがこの『言語研究とフンボルト』の前版であった。（『言語研究とフンボルト』、「序言」、2頁）

西哲叢書の一冊『フンボルト』が執筆されたいきさつは、以上のとおりであるが、肝心のフンボルトとの出会いはどうやら在学中のこのことである。それを、泉井久之助は次のように語っている。

¹¹ 管見の限り、泉井久之助のフンボルト受容を示す資料のなかで以下のものがだいたいその流れを見るのに重要である。

1934年『哲学研究』二二二号に「フンボルトの人間育成についての訳篇」が掲載。

1934年「史家の課題について」『哲学研究』京都哲學會、第十九卷第九號（総第二二二號）、89-114頁。

1938年『フンボルト』を田辺元監修の西哲叢書の一冊として出版。弘文堂

1943年ヴィルヘルム・フォン・フンボルト「比較言語研究について」（翻訳）、「昭和十八年七月」の日付がある。『言語學論攷』（敎文館、1944年、491-537頁）に収録される。

1976年『言語研究とフンボルト』弘文堂

1976年「フンボルト」『言語』Vol.5.No.1.1976.1.pp.88-94.

著書二冊を頭に、ほぼ泉井久之助の言語研究の初期から後期にわたって論文などの翻訳と紹介がなされている。

それにしても私は、私のきわめて若いころ—学生時代—に興味をいだき、またそののち長く離れていたフンボルトに、改めて今も、かわらぬ興味を大きく持ちうることに、一種のよろこびを感じている。(前掲書、8頁)

これを、西哲叢書『フンボルト』の序文にある、「この半年あまりの間に、私はあらためてフンボルトの全集を通読して、その業績と人となりとの發展を、やや詳しく窺うことができた」(西哲叢書『フンボルト』序文)と考え合わせると、すでに在学中にもフンボルト全集を通読したことになる。年譜によれば、泉井久之助は1927年京都大学文学部言語学科を卒業しており、小林訳『一般言語学原論』の書評を書いた1928年は大学院の二回生のはずである。大学院入学と前後して、フンボルトから一時期離れたことになる。そして西哲叢書『フンボルト』の序文は昭和十三年三月の日付を持っているので、恐らく改めてフンボルト全集を通読したのは、昭和十二(1927)年の秋からではないかと推定される。この間に十年の歳月を闊したことになる。果たして書評から窺う限りでは、1928年頃のフンボルト受容はまださほど深いものではなかったのである。それを端的に示す資料は、同じ1928年の執筆による「言語哲学」という一文である¹²。そこでは、フンボルトよりも、マルティの言語研究に強く惹かれていたことが窺われる。これも京都帝國大學新聞に掲載されたものであり、当時の泉井久之助の言語研究を知る上で重要な資料である。

近代の言語哲学については大體三つの派を擧げる事が出来ると思ふ。第一は英國のパートレー(一七四〇)やハリス Harris(一七五一)、佛蘭西のポール・ロワイヤルの文法家、獨逸ではフンボルトからシュタインタール、ヴント、カッシーラー、最近ではボルツイヒ、ヴァイスゲルバーなどに至るロマンティック派。この派の人の唱へる所は、言語と吾々の心的作用過程の必然的平行性を認め、言語より推して心的作用を逆に知る事が出来、異なる言語形式は異なる思考乃至知覺形式の相異を豫想する、従つて、構造(形態措辭)を異にした言語は、それを使用する人々の心的作用や世界觀の異なる事を示すといふのである。フンボルトはこの考への最たるものであつたが、ヴントと雖もなほこれを信じてゐる。ヴントの民族心理學の第一卷の二冊を占める『言語』は要するに外的言語形式から心理作用への歸納であり、單に話す人のみを對象として、聞く人、乃至話す人と聞く人の交換關係は非常に輕視されてゐる。或る人はこれを例證より出發する心理學的推

¹²原文は付録二を参照されたい。

論を旨とし、體驗心理學 Erlebnispsychologie を認めなかつたが爲なりと云つた。比較的大きいセンセーションを惹き起した有名な本でありながら、ヴントの『言語』がデルブルユツク、パウル、イエスベルセンなどの實際の言語探求にたづさはる人々から「何の益する所もなかつた」と非難されてゐるのは、この故であらう。

① フンボルトは偉大な頭と、驚嘆すべき努力によつて學び得た開明未開、東西古今の數多の言語が皆それぞれ一の纏まつた姿を有し、その言語を使用する人々には不便を感じしめない完全性を有してゐるのを見て、言語は人類の内的の心的機構によつて一時に生れ出でたものであり（生誕説）、従つて言語と思想は常に平行して進んでゆく（平行説）、言語は人類が人間としての共通點を有する限り、個々の言語に特有なものと、すべてに一般なるものと二つの性質があると信じた。事實フンボルトの言語説は特有性と一般性の闡明を目標としてゐると稱することも出来る。これらは彼れの説のアプリオリである。が一方彼れが偉大な博言家としての事實實例による言語の性質は必ずしもこのアプリオリと合一しない。

② 彼れの學説の矛盾動搖は彼れの學的努力を貫く一の悲劇である。言語は人間精神の自然的たる放射であるとアプリオリ的に云つたヴントにも、彼れが一面實際的の言語研究家であつたならば、やはりこの矛盾はあらはれて來なかつたであらうか。言語は個我と世界の認識又はその分離の手段であつたと説くのはカッシーラーである。吾々の思考作用が具象實際的から、直觀的となり、概念的となるに従つてそのシムボルたる言語も、個々の名稱を示すものより類の名稱を示すものとなり、更に純粹なる關係を示すもの即ち文となるのであるといふ。文は故に語に發生的に後れなければならない。近代の心理學から見て實際にかかる發達論は許される事であらうか。單語を知る事すら已に抽象作用に堪へる事を現すものでなければならない。一體にロマンティツク派は非心理學的である。常に個人を全くみとめないか、或はこれを社會と切りはなして奇妙な孤立の位置に置いて觀冊する。ボルツイヒなども、言語作用は個人から切り離してはならないに關らず、言語の意味をプラトーンのイデアの如く、超個人超社會的絶對の世界においた。ロマンティツクの人々は言語發生に關しては生誕説であり、言語の「生活」に就ては平行説を取る。

③ ロマンティツクの傾向が亡びゆくと共に、學説の根本も亦従つて亡びゆくべきものであらう。實際の言語研究者、即ち所謂實證派の人々が言語哲學を忌み嫌つたのも、要するに獨斷的なこの派の言語觀であつた。

引用は長くなつたが、ここに引用した下線部の①～③の三カ所は 1928 年当時の泉井

久之助のフンボルト受容を遺憾なく示していると言えよう。①ではその言語観に否定的な態度を取り、②では学説の矛盾動揺を指摘し、③では大胆にも「ロマンティックの傾向が亡びゆくと共に、學説の根本も亦従つて亡びゆくべきものであらう」と予言するあたりは、いかにも若き言語学者泉井久之助の面目躍如たるものを感じさせて感動的で面白い。マルティの言語研究に対する傾倒はたとえば次のような一文に現れている。

哲學の方面から出でて、この方面に活躍してゐるのは、「嚴密に學的な内面的經驗」に立脚した哲學を造る核心として心理學を置いたブレンターノの一派である。中でもマルティがその最たるものだらう。彼はブレンターノの心理學の分類に従つて、言語を發生的と記述的の二方面より觀察し、前者に於て言語の變轉の相と因をのべ、後者に於て言語要素の用と意味に従へる記述と分類をなしてゐる。彼の説は決して定説ではなく、常に激しい反駁を蒙つてはゐるが、最近のまとまつた心理學的言語観としては第一に推すべきものであらう。（『言語哲學』、初出：『京都帝國大學新聞』1928年9月21日、10月1日）。

しかし、泉井久之助のフンボルト受容はけっしてこの体のものに止まらなかった。もしこれに止まっていたならば、言語学者としての泉井久之助が「現代の最も偉大な言語学者」と評されることはなかったはずである。われわれはやはり1938年ごろ、つまり西哲叢書『フンボルト』を執筆していた時期のフンボルト受容を見なければならない。

3.2.2 1938 及び 1944 年頃のフンボルト受容

先に引用した『フンボルト』の序文においてすでに泉井久之助自身が語っているように、フンボルトとの二度目の出会いは恐らく『フンボルト』を執筆するための準備としてフンボルト全集を通読することに始まったと思われる。『フンボルト』には最初の出会いから始まったフンボルト受容が全集通読を通じて深化した跡だけでなく、泉井久之助の言語研究の初期のフンボルト受容の一大決算ともいえる。これはその内容に徴して明らかである。

例えば、『フンボルト』において泉井久之助は言う。

フンボルトの時代は言語學において近代的な實證性が樹立せられたときであつたが、しかも辨語論（Glottogonie）とも云ふべきものが全く跡を絶たなかつた。ボツプにさへいまだにそれが認められたのである。後のシュライハーのそれは有

名である。グルムにも全くないことはない。フンボルトの學說の中にも我々は一
二のそれらしいものを發見する（七の五五、七四）のであるが、幸ひ論旨の進行に
何ら影響あるものではなかつた。フンボルトの思索の徹底と性格の堅固を我々は
ここに見る様に思ふ。

しかしフンボルトの言語學說について注意しなくてはならないのは、フンボル
トの言語學は事實から出發しながらも實は言語を常に主として主觀關係において
(subjektbezogen) 即ち内主觀的 (intrasubjektiv) に考へてゐたことであつて、主
觀をはなれて (subjektentbunden) 即ち間主觀的 (intersubjektiv) に存立する言
語の部分に第一義的な意味を認めてゐないことである。即ち「言語は」本質的に
「エネルギーであつてエルゴンではない」のである。近代の所謂言語學はエルゴ
ンを第一の對象とする。フンボルトが暫く顧みられなかつたのはこのためであつ
た。けれども主觀の働きをはなれて言語はない。最近の言語學が再びフンボルト
に歸る傾向を部分的ながら見せてゐることは却つて事の自然であらう。(『フンボ
ルト』、278-279 頁)

と。これは「言語はエネルギーである」ことへの大きな傾倒である。しかし、若き言
語學者泉井久之助は、同じくフンボルトに対しても批判を忘れない。

しかしまた言語はエルゴンを除外して考へることが出来ない。言語は實はエル
ゴンであつて同時にエネルギーでなくてはならない。所産としてのエルゴンは
常に勢力たるエネルギーに反作用する。客觀はまた主觀に戻るのである。フン
ボルトはこの點は十分に認めてゐる。しかし十分に取扱つてはゐない。フンボル
トの取扱ひ方の方向は常に内より外へ、主より客へである。即ち偏に思辨的であ
る。客より主へ、外より内へは残されたる大いなる方向である。近代の言語學の
一部がフンボルトに歸りつつあるのも實はこの方向に於てである。態度はおのづ
から實證的技術的である。將來の言語の大きい研究はこの二つの方向或は態度の
實質的な綜合と媒介を目標としなくてはならない。ピューラーは幾らかこの目標
に志してゐる様である。内より外への方向では將來もフンボルトを凌駕するもの
はあるまい。フッサールの方向は内に止まる所に本領がある。

最後に、フンボルトの言語研究といふとき、人は同時に「言語はエルゴンでな
くして、エネルギーである」を思ひ出すのが常である。エネルギーといふと
き、それは活動におけるまた使用における言語機能そのものの意味であつて、同時

に主観的であり客観的であるものとしての言語を指してゐる。ソスユール以来最近の言語學が *langue* に對していふところの *parole* の本質も、實はこれを指してゐるのである (M. Langeveld, *Taal en Denken*. Groningen-Den Haag-Batavia, 1934. blz.72)。 *parole* に對して *langue* がある。だから一方に静止的な抽象的な體系としての *langue* の存在も無視することが出来ない。言語においては静止的なものは常に抽象的である。しかし我々は *parole* において *langue* を知るのであるから、二つは事實上區分が難しい (Gerlach Royen, *Spraak en Taal*. Amsterdam 1933.bbz. 17)。二つを引まとめて普通に「言語」といふ所以も一つはここに理由がある。フンボルトが「序説」に「言語」といふのは主として *parole* の本質の意味においてであつた。時には議論が迂つて *langue* の意味に用ゐてゐるところも一再ではない。時にこの區分に注意して *das Gesprochenhaben* といつてゐるところもあるが、この用語で二つの區別が勿論十分に盡せるものではない。論旨の曖昧はかうしたところにも胚胎する。我々はこれに注意して讀まなくてはならない。(『フンボルト』、279-281 頁)

このように、フンボルトに対して幾分批判的でありながら、言語観においては大きくフンボルトへの傾斜を示した泉井久之助であるが、これはいうまでもなく、『フンボルト』を執筆するために改めて全集を通読した成果であり、1928年から10年経って泉井久之助のフンボルト受容はようやく本格的なものとなり、その言語研究における存在もかつてにもまして大きくなったのである。その間の消息を示す例として、我々はさらに1944年『言語学論攷(敎文堂、1944年1月)所収の「言語哲学」の本文改訂に注目してみたい¹³。

改訂箇所一：②言語には吾々が設定するアプリーオリによる分析を常に超脱する「剰餘」の部分がある。しかもこの剰餘がかへつて言語としてはその本質的な象面である。自然、その學説には偉大な學的努力を貫く一の悲劇的な矛盾動揺を免れがたい。

改訂箇所二：③ロマンティツクの傾向が亡びゆくと共に、學説の根本も亦従つて亡びゆくべきものであらうか。實際の言語研究者、即ち所謂實證派の人々が言語哲学を忌み嫌つたのも、要するに臆斷的なこの派の言語観であつた。

「言語哲学」の初出本文と比較してみると、まず、フンボルトに対する批判、矛盾動揺の指摘が依然初出のままであるのに対し、「言語には吾々が設定するアプリーオリ

¹³ 改訂箇所は多数にわたるが、フンボルト受容の深化に関係する改訂箇所は以下のとおりである。なお、番号は先に引用した初出本文と対応するものである。

による分析を常に超脱する「剰餘」の部分がある。しかもこの剰餘がかへつて言語としてはその本質的な象面である。」と、「剰餘」を以てそれを補おうとしているのに注目したい。そして、③で原文の「であろう」を「であろうか」に書き換えた画竜点睛の一筆である。

このように、1938年から1944年にかけての泉井久之助のフンボルト受容には依然かすかな揺れを感じさせるものがあるが、それが『言語研究とフンボルト』（1976年、弘文堂）に至って、もはや揺るぎないものとなるのである。泉井久之助のフンボルト受容の決定的な表現は、やはり『言語研究とフンボルト』にみなければならない。

フンボルトは言語の一般を考えるとともに、また普遍的にもそれを明らかに考えて言語哲学の域に達したのである。—元来、言語の *irréductibilité* とはすなわち人間性の *irréductibilité* ではないのか、フンボルトはこう考えた。フンボルトは言語において人性を考え、人性において言語を考えようとしたのである。外的にして内的、実証的にして思弁的は、伝統的＝理論的、経験的＝哲学的と共に、啓蒙主義を脱して以来のフンボルトの生涯をつらぬく根本的な態度であった。この態度は言語研究において、もっとも抱括的にあらわれる。

前代と当代の単に思弁的な言語哲学や一般文法論に比較してフンボルトに格段の進歩があったのは、このためである。おのおのの言語の細部の事実を周到に、しかも博大に取扱ったその態度は、言語に関する一つの史的科学的樹立にも、大きい貢献と刺激とを与えたのである。言語資料自体に関して学界の視野を広げたことは、まさに当代の偉観であったといわなくてはならない。博大な知識と高邁な思想との結合は、フンボルトの前後において容易に比儔がない。人々が今もフンボルトを、いわゆる一般言語学の創始者とみなしているのは、ゆえないことではないのである。すべての言語哲学、すべての言語理論、すべての言語心理学は、今日においてもフンボルトを、たとえ唯一としないまでも、もっとも有力な出発点、もっとも信頼すべき足がかりとしている。かねて実証的分野にも大いなる刺激であった。（『言語研究とフンボルト』、197-198頁）

人間のあらゆる活動現象のうち、言語ほど人間に緊接な関係を持ちながら、しかもおのれに関する理論にこれほど無関心なものは、またあるまいと思われる。したがって右にふれた人々も、ソスユール以下、各人各様にそれぞれの心にかなう言語理論を無害に展開して、各人なりに言語に対処する態度をきめることがで

きた。フンボルトの言語理論ないし哲学も、そうしたものの一つにはちがいない。しかしフンボルトの努力はそこであって、前後にもっとも成功的な試みであったとはいうことができる。ことにそのペルスペクティブの壮大と深徹の点においては、何としてもわれわれを打つものがある。これは大型の人々がみないところである。(『言語研究とフンボルト』、200-201頁)

特に下線部と先に引いた『フンボルト』のフンボルト評価を読み合わせれば、1938年から1976までの38年間の間に、言語学者泉井久之助にとってのフンボルトはいかに大きな存在となっていたかがわかる。実際、『フンボルト』において特に強調されていた「言語は實はエルゴンであつて同時にエネルギーでなくてはならない」という考えは『言語研究とフンボルト』には見あたらない。同時に後者のフンボルト評価を前著には得られないのである。泉井久之助のフンボルト理解の深化であり、その間の言語学史の浮き沈みが著者泉井久之助により自信溢れた力強い表現を取らせたのであろう。しかし、言語学者泉井久之助はけっしてフンボルトの考えを墨守することに飽き足らなかった。フンボルトの影響を存分に受けつつも自らの言語観として大成したのである。

4. 泉井久之助の言語研究

4.1. 「言語観」——「エネルギー」、「剰餘」そして「体系性」

言語学者泉井久之助のフンボルト受容を示す決定的な文献は、やはり1976年同じく弘文堂から改訂新版として出版された、『言語研究とフンボルト』を第一に挙げなければならぬ。これは、泉井久之助自身にとってフンボルト研究の集大成を意味するだけでなく、泉井言語学の真骨頂を遺憾なく示す名著として今にその価値を失わない。ここでは、たとえば、「エネルギー」については、次のように述べている。

自由に対して自然がある、理性に対して感性がある。カントの哲学は常に一元を目指す二元論の哲学である。すなわち争闘があり努力がなくてはならぬ。人間の自由は行動し争闘する限りにおいて自らを維持することができる。図式性の本質は精神の無限の努力である。言語もまたフンボルトがためには自由の性格をもつ。そして言語の本質はやはり努力であり不断の「試み」である。音を表現たらしめようとする終ることのない精神の努力と試みである(七の一〇〇)。一方に自然の立てた法則性の原理がある、他方に人間の自由の原理がある。この二元の一元化的努力の中に言語の本質は見るができる。言語はできあがった固成体(エルゴン、ἔργον)、ではな

い。それはエネルギー（エネルギー、ἐνεργεια）である。フンボルトがどうしても限定性と若干の固定化を伴う一つの体系を早急に構成するのをもっとも嫌ったのは、このためである。しかも言語は一つの体系だといわれることが現代ではおおい。体系とはここで果たして何を意味しているのでしょうか。それは単に無反省に呼び交わされる一つの合いことばにすぎないのではあるまいか。仮りに言語は体系だとしても、それは一定の枠に嵌められて、動きの自由と自発性の生起を差しとめられた closed system ではあるまい。だからこそ言語は大思想の表見的乗輿となり、新鮮な感じ方の表現者となり触発者となることができた。史的に見た言語の変化もまたこれによって起こることができたのである。あえて「体系」の語を用いていうなら、言語はつねに体系化の途上にあるとともに、体系破壊の途上にもある。それは常に動いている。それはエネルギーである。そこには、自由がある。「人間の言語」だからである。（『言語研究とフンボルト』、275-276 頁）

しかし、どちらかといえば、1976年頃の泉井久之助にとって、言語をただ「エネルギー」と規定するだけでは著しく物足りなかったに違いない。そこにはさらに次の引用のように、「体系性」、しかも「開かれた体系」としての内実が込められていることから明らかである。同じことを、また場所を換えて次のように言っている。

「言語を単に語の集積（aggregatum）と考えてはならない。それぞれの言語はいずれも精神が音声と思想とを結合するに際して従うところの体系である」（Kawi-Werk. II. 220）。体系はまた固定的な枠と考えてはならない。有機体においては「体系」はかえって相対的な概念である。常に活動と発達と遷移がそこにある。それは「開かれた体系」（open system）である。この体系はその生命的な作用の潜在的な形式である。無限の体系である。いかにもそれは<< open system >>である。体系ではあっても、それは開かれている。つまり「体系性」（systematicity）はあることになる。（『言語研究とフンボルト』、340-341 頁）

いや、「エネルギー」といっただけでは、それはまだまだ「有機体」という言葉以上に出ることはないであろう。ここにいう「無限の体系」は、コセリウがいった「言語の発達とは、肆意的で危っかしい絶えざる「変化」ではなく、絶えざる 体系化（引用者注：下線部は原文では下点）である。そして「言語の状態」一つひとつは、まさにこれが体系化の瞬間であるから、体系的な構造を示しているのである」（前掲書、222-223 頁）という言葉を想起させる。ここでも洋の東西に別れた二人の世界的な言語学者が通

じ合っていたのである¹⁴

我々はここに、フンボルトの「言語はエネルギーである」という考えを、「剰余」でもって発展させ、最終的には言語の体系性は「無限の体系」である——「言語はつねに体系化の途上にあるとともに、体系破壊の途上にもある」という考えにまとめ上げられたことに注目したい。管見の限り、言語学者にして、言語研究の「剰余」の問題に真っ正面から立ち向かい、それを凝視しつつ、言語を研究した人はひとり泉井久之助を措いて他にいない。実際、「無限の体系」も言語の「剰余」も等しく言語がエネルギーであるという考えからの必然的な展開なのである。泉井久之助は次のようにいう。

言語理論は現下において、なおいくつか算えることができる。たいていは右と同様の傾向を示す。なかについて特に光っているのはロマン・ヤーコブソンの音形 (Laut) 一般に関する論理実証的な考究にもとづく理論である。しかしその理論も言語の全面にわたるには至らない。さまざまな言語理論によっても、やはり言語の記述と理解は完了したのではない。いくら記述を重ね、具体の表裏によって理論的に説明しても、常にわれわれの自由にならないものがそこに残る。résidu である、剰余である。言語は究極において実は何とも手のつけようがない。結局は事実上、irréductibilité があっても言語学はその研究の歩みをただちにそこでゆるめることはできない。事実、実証の範囲内では言語学は原理の上に若干の進歩を持った。けれども、実証的な言語学は実はこの irréductibilité を避けて通っているのである。実際、言語にはここに目をつぶっていてもすすむだけの分野の余地もある。(『言語研究とフンボルト』、196 頁)¹⁵

4.2. 理論的 (言語哲学的) 研究と実証的研究

泉井久之助の言語研究は大きく終戦の年 1945 年を境に、まず前期・後期の二期に分かつことが出来る。そして前期は 1938 を境に、さらに第一期と第二期、後期はさらに京都大学を退官した 1969 年を境に第三期、第四期に分かつことが出来る。前期の境界

¹⁴ 「言語研究の歴史」(『講座日本語 1 日本語と国語学』、岩波書店、1976 年)、「言語と言語研究における「剰余」の問題」(『言語研究』第四十二号、日本言語学会、1-14 頁、1962 年 10 月 31 日発行。後に『言語の世界』(筑摩書房、1970 年)、167-184 頁に再録)を参照されたい。

¹⁵ 管見の限り、泉井久之助が最初に「剰余」の考えを打ち出したのは、『フンボルト』(1938 年、弘文堂)においてである。そのほぼ二十四年後「言語と言語研究における「剰余」の問題」(『言語研究』(第四十二号、日本言語学会、1-14 頁、1962 年 10 月 31 日発行)においてはさらに体系的に論じられている。『言語の世界』(筑摩書房、1970 年、167-184 頁)に再録。なお泉井久之助自身によれば、「剰余」の考えと用語そのものは、ヴィルフレード・パレート (Vilfredo Pareto) 『社会学綱要』に基づいているという。

線を1938年に設定したのは、この年の前半に西哲叢書『フンボルト』を出版したこと、1938年の夏に初めてミクロネシア諸言語の調査を現地において遂行したことを重くみたためであり、第三期と第四期の境界線は退官による研究活動への影響を重くみたためである。事実第四期の主な仕事は、1976年に『フンボルト』の改訂新版『言語研究とフンボルト』を出版したこと、印欧語の研究と研究活動の指導、研究施設の創設などに傾いていたからである。これを第三期のはじめに矢継ぎ早に発表された日本語関係の論文、たとえば日本語の系統についての諸論文（1951年～1952年）、『否定表現の原理一つの意味論的分析』（1953年）、『語順の原理』（1955年）などと比較すればその間の消息はつぶさに知れるところである。

前期では、単行論文を別にして、重要な単著だけみても、1938年に『フンボルト』、1939年に『言語の構造』（初版）が出たのと、後期では1976年に『言語研究とフンボルト』、1978年に『印欧語における数の現象』が出版されているように、前期、後期を通じていえることは、泉井久之助の言語研究は常に理論的な研究と実証的な研究の両方を同時に遂行したことである。これは、すでに1928年において泉井久之助の言語研究の基本姿勢として説き明されていたものである。

理論は理論に代替せられ、これらの學説も更に姿を革めて更に完全性に向つて歩みを進めるであらう。言語の実証的研究が理想的研究に負ふ所は多い、しかし現今に於ては理想的方面の研究の進歩は遙かに實証的の下にある。且つ實證をばなれては理想的研究も一片の空想である。二つの傾向は常に相倚り相祐けるの關係を失つてはならない。（「言語哲学」、初出：『京都帝國大學新聞』1928年9月21日、10月1日）

ここでいう理想的研究とはつまり理論的、言語哲学的研究の謂いである。そして、よりまとまった形としては、次に引用するところはその代表的な言説といえよう。

資料を単に資料によって追求しているかぎり、われわれは資料の真の統一者を認めることができない。言語事実を言語事実によって追求しているかぎり、われわれは言語事実の真の統一者を認識することができない。真の統一は、真の整合は、Stoff（資料）自体にないからである。それは、われわれの認識能力の総合的な活動によって、はじめて得られることができる。具体の立場のみに立って具体を見るかぎり、われわれはただ対象を、結局は外形的形象において見るばかりである。言語の真とは何か、本質はどこか。われわれの能力である。能力にある。わ

れわれの精神の力にある。エネルギーにある。フンボルトはこう考えた。(『言語研究とフンボルト』、199-200頁)

ここでフンボルトの考えとしたのは、やはり言語学者泉井久之助におけるフンボルトの存在の大きさの現れと見るべきであろう。もちろんかかる考えは両者の共通した認識であることはいうまでもないが、我々にとっては、まずこれを泉井久之助の考えとして読む必要がある。言語研究になぜ理論的な研究が必要なのかについての答えとしては、これ以上の言葉を要しない。

5. 結び

泉井久之助はいう、「フンボルトの言語学説の基本は、近來のあらゆる言語学説を可能性において支える基盤としての存在と作用をつづけている。人はその広さと深さのゆえんを容易に理解しなかつただけである。」(『言語研究とフンボルト』序言、10頁)と。筆者もけっして泉井久之助の言語研究の広さと深さのゆえんを理解しているとは自認しない。が、泉井久之助の言語研究はそのもっとも強力なエネルギーをフンボルトから受け取り、終始一貫してその言語哲学的研究と実証的な研究を恰も車の両輪の如くバランスよく穏やかに走らせることが出来た、数少ない世界的な言語学者の一人であることはもはや言って差し支えない。

泉井久之助が研究対象とした数々の言語の何れについても筆者のよく知るところではない。泉井久之助の個別言語についての実証的研究については、それぞれの言語を専門とする言語学者の論考に俟ちたい。

参考文献:

- 泉井久之助 (1938) 『フンボルト』、弘文堂
- 泉井久之助 (1939) 『言語の構造』(初版)、弘文堂
- 泉井久之助 (1944) 『言語學論攷』、敝文館
- 泉井久之助 (1956) 『言語の研究』、有信堂
- 泉井久之助 (1967) 『言語の構造』(増補版)、紀伊国屋書店
- 泉井久之助 (1970) 『言語の世界』、筑摩書房
- 泉井久之助 (1976a) 『言語研究とフンボルト』、弘文堂
- 山口 巖 (1999) 『パロールの復権』、ゆまに書房

付録一：小林英夫氏譯 ソツスユール言語學原論を讀みて（上・下）

小林英夫氏譯 ソツスユール言語學原論を讀みて（上）¹⁶ 泉井久之助

言語學とは何ぞやといふ問に對して、簡単に言語を研究する學問であると答へられるならば、我々はそのあまりに漠として據所のない定義に不満を感じるのであらう。言語學は文字通り言語の學には相違ないが、それが一科の學として成立し他の科學との關係を明かにする爲には、豫め言語學の對象としての言語の意味を明瞭にして置かなければならない。最も學的なソツスユールの原論は對象としての言語の定義を以て始まる。

今迄我々に紹介された獨英の書物、及び此れに則つて公にされた我國の著述は、言語學の定義を以てはじまり、對象としての言語そのものの性質を論ずることなく、單に常識の解釋に一任されて顧みられない有様であつた。故に言語に對しては我々の意識過程の外面的表出に關する限り如何なる事を云ふも差支ないやうに信ぜられ、従つて言語に關係する言語學は高等常識の如くに看做されて來たのである。明治の初年には堀秀成翁の音義説があつた。我國のいろは四十八文字のシラブルは各々獨自の意味を有し、このシラブルの組合せによつて意味の種々な組合せを得、今日の日本語の基礎を造つたといふのである。間投詞の如く感情の瞬間的發出に由來する所の多いものには或はこの假説も一部の効力を見出すかも知れないが、我々は翁の唱へるシラブルの意味は、却て既に成立せる單語から歸納的に抽出されたものであるかを疑つてみなければならぬ。假令この方法に依つて抽出された音義が正しいとしてもその意義は抽象的意義でこそあれ、決して始原的意義ではない。故にこの組合せに依つて今日我々の有する日本語の單語の意義を説明せんとするのは循環論である。羸弱なメタフィジツクの支配した明治の初年には或はこの説も妥當であらう。然るに先年出た井口丑二氏の日本語原はなほ秀成翁の音義論に贊し、これを祖述してゐるのである。火は日本語でヒ、希臘語でピユール、佛蘭西でフェウ、獨逸語でフオイア、英語でファイアであるから、火の如く杳々として力あるものには世界何れの民族も八行バ行の音を用ひて示す、これには根柢に於て相通ずるものがあるとしなければならぬ。従つてヒの音には火を意味するに足る原義が含まれてゐるに相違ないと結論する。我々は果して日本語と希臘語、英獨佛語

¹⁶この書評は、『京都帝國大學新聞』昭和三年五月一日（火曜日）第七十五號、昭和三年五月十一日（金曜日）第七十六號に、二回にわたつて発表されたものである。なお、轉載に際し、明らかな誤植を含めてすべて初出のままとしたが、欧文の綴りなどの転写による誤りの恐れがある。引用される場合は和文、欧文を問わず原典によって確認されたい。

等を含む印歐語との間に何れも相似の素質、體質を有する人間が用ひた言語であるといふ事以外に如何なる関係があるかを未だ審かにしない。しかし東西同じ概念を表明するに反対に近い音形を使用するのは日常経験する所であり、逆に相似の音が全く相反した意味を有する事も例を擧げるに難くない。伊太利語のカルドオ Caldo は温い熱いの意味であるに反し、アルプを越えた獨逸ではカルト Kalt を寒い冷たいの意味に使用する。而も伊太利語も獨逸語も遡れば遠き過去に於て一致する親族語である。親族語に於てすらこの有様であるとすれば、我々は如何なる理由に安んじて井口氏の東西「火」音比較考を受容れる事が出来るであらうか。且つ伊太利の Caldo を生出した羅典語の Calidus, Caldus は佛蘭西の地ではシヨー Chaud に化してゐる。カルドオとシヨーには何の通じた音もなくなつてゐるではないか。言語は變化する。變化するのが言語である。變化を蒙らずして維持するものは偶然である。ソツスユールは次にこの點を明かにしてゐる。

言語は變化する故に我々は益々これを慎重に取扱はなければならぬ。單に現在に於ける音の似寄りを標準とすれば、我々はカルドオとシヨーが同源である事をも見のがす事になるであらう。煙を意味する佛蘭西の Fum'ee と獨逸の Dunst 英語の Dust が関係があり、佛蘭西語の Faire と獨逸語の Tuo が共通の要素を含む事は必然的に看過せられて、却て何の関係もない英語の Pad と、同じ意味の斯波の Bad が近寄せられることになるであらう。カルドオとシヨーが、現在の形を異にしても歴史的には曾ての同形に發したに對して、二つのバツドは歴史的の手續を以てすれば、別々の源に發して別々の音韻變化を行ひつつ偶然同じ形に落合つたのである。故に我々は單なる音の似寄りを以て言語比較の材料とする事は出来ぬ。比較言語は常に歴史的方法を豫想しなければならぬ。故に先月の思想の寺田寅彦氏の「比較言語學に於ける統計的研究可能性について」の論旨は全く不可能である。(未完)

小林英夫氏譯 ソツスユール言語學原論を讀みて(下) 泉井久之助

言語は變化する。が決して個人のアルビトレエルに依つて變化するのではない。言語の用は他人と思想を交換するにある。故に言語は、我々が社會——最小の單位をとつて二人きりの社會であるとしても——に於て用ゐる限り必然的に相互の掣肘を受けなければならぬ。社會活動としての言語は或意味に於て個人から獨立してゐる。社會が大きくして且つ相互の交渉關係が緊密であるだけ、個人は社會性のために言語の個人性を拋棄しなければならぬ。即ち言語には社會的法則が働く。故に言語の變化も亦社會

——切言すれば言語團體全體として行はれてゆく。假令有力なる個人の作用があつても、それが社會に採用されない限り、その作用は明日を待たないのである。言語學が學として成立し得るのは一にこれによる。だから言語學にはアルビトレエルは許されないのである。ソツスユールはこの點を力説する。

言語は社會活動であるとしてもこれを使用するものは個人を措いて外にない。のみならず社會活動としての言語も、もとは個人の言語に發したものである。が言語が社會の慣用となるに従つて、他のすべての社會的行為の如くその有する意味は次第に平均されて、單なる概念の符牒となり了るのは明かである。個人の抱く感情感覺的方面の表現は、無味に化した社會言語の表現を以てしては不充分である。故に社會活動としての言語のほか個人活動としての言語が成立する。却て後者は前者の基底である。ソツスユールは前者を言語と呼び、後者を言と稱する。固有の意味の言語學は前者に成立つのは勿論である。

しかし我々が全く個人的方面を表現するにも、言語から獨立にこれをなし得るには我々はあまりに言語の支配を受けすぎてゐる。我々が如何に免れんと努力しても無意識の中に習ひ覺えた言語は吾々の頭腦の中に蟠居して我々の思惟感情の方向を決定する。言語は「抽象的實體」Entité abstraite として我々の頭腦を支配する。我々は思想に従つて言語をやるのではなくして言語に従つて思想をやるのである。言語に習熟した人は如何に自由に言語を行ふ如く見えても彼が理解せられる事を必要とする限り、言語の掣肘を免れることは出来ぬ。故に佛蘭西當代の文法家ブルユノオがその著『思想と言語』に於て佛蘭西語を思想に依つて分類せんとして Pronom の名稱を廢して Nominal 或は Pre'sentant の名稱を以て置き換へるなど、文法範疇の改革を企てたが、爲す所はやはり言語を標準とせざるを得なかつた。彼は抽象的實體としての言語を忘れてゐたのである。イエスペルセンは流石にこの點は折衷的であり、穩健であるが、ソツスユールは明晰にこれを主張する。

言語はまた間投詞を含む如く、言から最も個人的、感情的な方面の表現手段の登録を受けてゐる。個人的感情意志的方面の様々の手段も、表現の最も特殊で激烈な精神病者の場合を除いて、普通無意義に言語を借用して行はれる。已に社會構成分子としての個人は或時は極めて内面的な部分まで社會活動としての言語に頼る如く、概念的な言語には従つてまたこれに應ずるだけの意志感情的方面がある。言語のこの方面の研究は未だソツスユールの爲さざるところであつた。ジュネーヴに於ける彼の弟子シャルル・バリイ氏が、Stylstigue(私はこれに對する適當な譯語を知らない)と稱する研究はこれ

を對象とする。

斯くの如く定義された言語は時に従つて分てば古代語があり近代語があり死語があり生語がある。所に従つて言へば自由語があり他國語があり方言がある。社會に於ては標準語があり通用語があり官用語があり卑語隱語、乃至特殊階級、特殊職業團體の言語がある。しかし本來の意味の言語學の對象とするのはその何れでもあり、またその何れのみでもない。「言語學は言語そのものをそのものとして研究する」からである。言語を研究するに、古代にしる現代にしる時の縱軸の一點に空間の横軸を引いてこれに現れる言語現象を研究する事もあれば、時の縱軸に従つて流れ下る同一現象の變遷を調べる事もある。前の方法をソツスユールは共時言語學と稱し、後者を通時言語學と稱する。文法は同一時期の言語現象の體系的總和である。文法には類推作用は働いても語學者的語原意識は働かない。古代から承け繼いだ言語現象も現代に於て創造された現象もそれが一つの時代の用語である限りは、語る人は同一の取扱を與へる。この取扱様が文法である。故にソツスユールには時の軸をビヴオとする歴史的文典といふものは存在しない。パウルの獨逸文典、ブルユノオ或はニューロツプの佛蘭西歴史文典は彼の學說には認められない事になるのである。しかし學理的には甲乙の議論はありながら 에스ペラントが實際上偉大なる機能を実現してゐる如く、歴史文典は彼の立場には認められなくともその存在の理由を失ふものでない。一般にソツスユールの學說は非常に明徹であり、宛も影のない世界に似てゐる。従つて或點は乾燥しステリルであるのは、佛蘭西言語學の泰斗メイエが後年自らの若い時の講義を述懐して、餘りに學的であり、嚴酷な態度は捨てやうと思つたと云つた言葉を思ひ起させる。

通時言語學は言語事實の時の流れに於ける跡付けである。故に現代以前の言葉は書かれたものに依頼しなければならぬ。即ち廣義の文献である。文献の整理と價値の決定は文献學の言語學に果してくれるセルヴィスである。獨逸のベヨツクの『文献科學汎論並びに方法論』はこのセルヴィスの總括である。が文献科學は全く書かれた言葉のみを對象とする事を忘れてはならない。且つその對象は主として古代の文學であり、過去の一點でなくして過去の數時代に散在する言語現象を、宛も我々が宇宙の遠近に散在する星を星座として眺める如くに假りに一平面に寫したものにすぎない。従つて文献科學と言語學とは嚴重に區別せられなければならぬ。

時の軸に乗つて下る言語現象は必然的に變化する、しかし同じ地域に住して個人相互の交通の激しい緊密なる言語團體は一團として同一の變化を経験し、或一定の時の後には始め同一の共通語を使用した他の言語團體とは別の變化を経て別の言語状態に到

達することになる。方言の發生がこれであり更に分裂して相互の理解が困難不可能となれば別々の言語となる。かかる變化現象には時の要素の外に地理的擴がり関係するから彼は通時言語學から地理言語學を獨立せしめてゐる。しかしソツスユールは地理が何故にこの原因となり得るかについては審かに説く所がない。單に土地を異にしただけでは何の差異をも來すことなしとは純理的に考へ得られる所である。大切なのはそれによる社會的要因の相違である。故にメイエは言語現象の社會的方面を特に重要視する。根幹を一にする日本語と琉球語があれだけ隔つたのも、羅馬帝國に廣まつた同一の拉丁語があれだけの様々な國語となつたのも皆歴史的社會的要因の差異である。

この要因の差異を慎重に除去しつつ言語變化の非任意性即ち社會性を利用しつつ各々の方言を歴史的に遡る時は、我々はその結果を比較する事に依つてこの共通語を再構する事が出来るであらう。原語の再構は通時言語學及び地理言語學の重要な應用的方面であり、言語學そのものの仕事が一時全く此の事業のためにのみ行はれて言語學の存在が單にこれに依つて認められてゐたこともあつた。再構は現代から過去を仰ぐ。ソツスユールはこれを逆視言語學と稱する。

かくの如く彼は先づ言語學の對象を決定して、それを取扱ふ方法現明かにする。一卷の言語學原論は之を要するに嚴密なる言語學の定義であり、崇高なる入門の書である。叙述の正確にして明快なことは今迄我々に示されなかつたところである。原文のクラルテとブレヴィテは小林氏の譯文はまたよく之を傳へてゐる。

著者フェルデイナン・ド・ソツスユールはジュネーヴの貴族の出であり、一七八七年はじめてモンブランの絶巔を征服した自然科学者オラース・ド・ソツスユールの直系である。メイエの批評に依れば非常に緻密な體系的な頭の學者で、言葉は美しく、教授の態度は如何にも藝術家でありその講義は全くの藝術品であつたといふ。言語學原論の明徹精緻も亦確かにその倣を留めて流麗である。

今日の佛蘭西の言語學界はその質に於て、その量に於て、その意氣に於て、その方法と範圍において遙かに獨逸の言語學界を壓してゐるのは人も認める所である。今日のこの盛大を致す礎を置いたのはミシユル・ブレアルと我がソツスユールの二人である。ブレアルの學統には佛蘭西方言口（一字判読不能）圖の完成に有名なジリエロンがあり、ソツスユールにはこれを繼ぐに偉大なるメイエがあり、パリイがあり、スシユエがあり、グラモンがあり、更にメイエの下にはセミツト言語學に雄飛するコーアンがあり、他にヴァンドリがあり、これに續く各方面の學者はメイエとコーアンの主宰する大冊『世界の言語』の成立に來り參し、佛蘭西學派の隆昌は目を驚かすものがあるが、その

一方の礎の主著を先づ我國に紹介されたことは我々の大きい喜びであり、意義ある事柄である。

小林氏の譯は叮嚀正確明瞭、しかも簡潔であり、註釋附録を加へて翻譯として我々の望み得るすべてを盡してゐる。原著の術語は正確に寫して余蘊なく、所々に出る人名には必ず生歿の年代を書き入れて我々の便に資し、未だ不明のものは空白の括弧を附してある程である。ただ我々としては他の何人よりもソツスユールその人の生歿の年次を聞きたかつた。

唐突の間改めて原文と照合する違もなかつたが譯文四一二頁「或は又、領土の一點からあらゆる方向へ放射状に歩いて見る。さうすれば（方言的差異）の隔たり方こそ異なるが——各方面に増加するのを見るであらう。」の中の「隔たり方こそ異なるが」は原文ではむしろ *de facon diffe'rente* を *argumenter* にかけて「増加のし方こそ異なるが」とすべきであらう。方言的隔たりのあることは明かなのだからここでは原文通りにしなければ意味が合はない。また七三頁「故には或は S と關係のつかぬ假説は凡て斥けることが出来る」は「T 或は S の何れか一方にのみしか關係のつかぬ假説は凡て斥けることが出来る」である。此處の譯は誤解を惹起し易い。また八頁「マクス・ミュラーは懸河の辯を以て比較言語學を通俗化した。併しその功過推半ばする所の必ずしも配慮の餘りに出たものではない。」この中の第二の文の方は譯者も意味不審とせられて巻末の「譯者の疑問」欄に載せてゐられた位であるから私には分らないが、マクス・ミュラーが流麗な才筆を揮つて言語學を英國の内外に通俗化せしめた事はよかつたが、彼の言語學の淺薄にして誤謬多き事は方々で非難される所である。それで私は原文の *mais cen'est pas par exces de conscience qu'ila pe'ehe* を文字通り「彼が罪を犯したのは配慮の餘りに出たものではない」と譯して皮肉に取る。従つて懸河の辯も *brillants causerie* 即ち絢爛の意にとりたい。

原文は難解にして簡潔で、メイエも端から端まで沈思して考へるべき本だと云ひ、バリーもソツスユールの書いたものは行を読むよりも行の間を読む方が面白いと云てゐる程である。我々はこの難解な良書を提供せられた小林氏に感謝を捧げたい。（四月二十日）

付録二：「言語哲學」（上・下）『京都帝國大學新聞』1928年9月21日、10月1日
「言語哲學」（上）¹⁷ 泉井久之助

言語に音韻的の方面と意味的の方面がある。だから言語学にも音韻的にやつて行くものと、意味の方から進むものとある。しかし元來音と意味は言語としては離して考へることの出来ないものであるから、音韻を中心とする研究に意味の方面が吻入するのは當然であり、意味的方面からの考察に音韻の方面を無視しては甚だしい誤謬に陥るのも勿論である。音の方面の研究には一般に言語の音なるものを調べる音聲学派、一國語一方言の發音を研究する發音学者、また A なる音の古音は如何、現代音までにいたる音韻變化の徑路は如何、これに對應する他の國語言語の音は如何などを歴史的比較的に検討する歴史派、乃至比較言語學派がある。音そのものは言語の思想的な他の方面に比して甚だしく實體的であるから、従つてその實在性が非常に顯著な姿を以て、言語研究者の目を惹くと共に、頼むに足る手固い、客觀的な足場と見られたから、十八世紀の中葉言語學が比較言語學によつてはじめて學の形式をそなへた時以來、言語研究の進路はほとんどこの音韻的方面の一途を出でなかつた。言語學の物理的方面である。

併し言語を意味に關係づけて考へると、問題はしかく簡單ではない。音と意味の關係、言語と思想との關係、言語と社會との關係、進化論に關聯して人間言語と獸類の叫び聲との分離の問題、従つて眞の意味における言語なるものの發生などは單に音を以て音を研究し、常に音を中心とする前者の方法には考量せられ得る餘地はないわけである。言語の曲げや文章法なども意味を度外に附しては考へることが出来ない。而も見た目には極めて非實體的な意味的方面の探求は、較量すべき分明な標準を持たぬだけ、久しい間、何らかの意味に於て必ず客觀性を要求する學の一つとしては認められなかつた。悪き意味の「形而上學的である」事の故を以て常に前者の「眞面目な」言語學研究の範圍からは除外されつつあつた。しかし言語が吾人の心的作用をはなれて單に物理的にのみ存在し得ないとすれば、廣義の意味的、即ち心的作用より出發する言語研究は、物理的方面に比して後れたりとは云へ、棄てておく事は決して許されぬ。時には我々は専らこれに依つて研究を進めなければならない。フォスラーは前者の傾向を言語學における實證主義と稱し、後者を理想主義といひ、大に理想主義的言語研究を唱導した（一九〇四）後者所謂言語哲學は最近言語学における重要な問題である。

近代の言語哲學については大體三つの派を擧げる事が出来ると思ふ。第一は英國の

¹⁷この論文は、『京都帝國大學新聞』昭和三年九月二十一日、昭和三年十月一日、二回にわたって發表されたものである。

パートレー（一七四〇）やハリス Harris（一七五一）、佛蘭西のポール・ロワイヤルの文法家、獨逸ではフンボルトからシュタインタール、ヴント、カッシーラー、最近ではボルツイヒ、ヴァイスゲルバーなどに至るロマンティック派。この派の人の唱へる所は、言語と吾々の心的作用過程の必然的平行性を認め、言語より推して心的作用を逆に知る事が出来、異なる言語形式は異なる思考乃至知覚形式の相異を豫想する、従つて、構造（形態措辭）を異にした言語は、それを使用する人々の心的作用や世界觀の異なる事を示すといふのである。フンボルトはこの考への最たるものであつたが、ヴントと雖もなほこれを信じてゐる。ヴントの民族心理學の第一卷の二冊を占める『言語』は要するに外的言語形式から心理作用への歸納であり、單に話す人のみを對象として、聞く人、乃至話す人と聞く人の交換關係は非常に輕視されてゐる。或る人はこれを例證より出發する心理學的推論を旨とし、體驗心理學 *Erlebnispsychologie* を認めなかつたが爲なりと云つた。比較的大きいセンセーションを惹き起した有名な本でありながら、ヴントの『言語』がデルブルユツク、パウエル、イエスベルセンなどの實際の言語探求にたづさはる人々から「何の益する所もなかつた」と非難されてゐるのは、この故であらう。フンボルトは偉大な頭と、驚嘆すべき努力によつて學び得た開明未開、東西古今の數多の言語が皆それぞれ一の纏まつた姿を有し、その言語を使用する人々には不便を感じしめない完全性を有してゐるのを見て、言語は人類の内的の心的機構によつて一時に生れ出でたものであり（生誕説）、従つて言語と思想は常に平行して進んでゆく（平行説）、言語は人類が人間としての共通點を有する限り、個々の言語に特有なものと、すべてに一般なるものと二つの性質があると信じた。事實フンボルトの言語説は特有性と一般性の闡明を目標としてゐると稱することも出来る。これらは彼れの説のアプリオリである。が一方彼れが偉大な博言家としての事實實例による言語の性質は必ずしもこのアプリオリと合一しない。彼れの學説の矛盾動搖は彼れの學的努力を貫く一の悲劇である。言語は人間精神の自然的たる放射であるとアプリオリ的に云つたヴントにも、彼れが一面實際的の言語研究者であつたならば、やはりこの矛盾はあらはれて來なかつたであらうか。言語は個我と世界の認識又はその分離の手段であつたと説くのはカッシーラーである。吾々の思考作用が具象實際的から、直觀的となり、概念的となるに従つてそのシムボルたる言語も、個々の名稱を示すものより類の名稱を示すものとなり、更に純粹なる關係を示すもの即ち文となるのであるといふ。文は故に語に發生的に後れなければならない。近代の心理學から見て實際にかかる發達論は許される事であらうか。單語を知る事すら已に抽象作用に堪へる事を現すものでなければならない。一體にロマン

ティツク派は非心理學的である。常に個人を全くみとめないか、或はこれを社會と切りはなして奇妙な孤立の位置に置いて觀察する。ボルツイヒなども、言語作用は個人から切り離してはならないに關らず、言語の意味をプラトーンのアイデアの如く、超個人超社會的絶對の世界においた。ロマンティツクの人々は言語發生に關しては生誕説であり、言語の「生活」に就ては平行説を取る。ロマンティツクの傾向が亡びゆくと共に、學說の根本も亦從つて亡びゆくべきものであらう。實際の言語研究者、即ち所謂實證派の人々が言語哲學を忌み嫌つたのも、要するに獨斷的なこの派の言語觀であつた。(未完)

「言語哲學」(下)

第二の派は伊太利の評論家クローチェからさきのフォスラー及びミュンヘンの一派ハッツフェルトなどのロマンストを中心とする美學派である。クローチェの有名な直觀即表現、即ち藝術とする自由奔放な美學によつて表現としての言語も亦一の藝術品であり、表現としての言語はまた直觀そのものである、言語の發生は直觀にあり言語間に於ける上下の差別は直觀に上下をつけ得ない限り存在する事を得ないものである、從つてこの直觀は詩的直觀であり、言語は即ち詩である、とする。故に直觀が嚴密に言へば個人個人に依つて異なるならば、言語即詩も、各人即ち詩人によつて自ら相異なる所がなければならぬ。即ち前の平行説を認めなければならぬ。フォスラーの考へはクローチェと必ずしも一致しないが(Croce, Problemi di Ethetica)、詩人の個人個性的詩語を研究の出發點として、言語の背景に到らんとする傾向は同一である。從つて彼自身の學說も興味は深いものではあるがあまりに詩人的獨斷のある事は見逃す事は出来ない。言語學者はサイキーがあればサイコロヂイは要らないと號してゐるが、心的作用の客觀的研究の試練を経ないサイキーは御都合主義的獨斷に陥り易しとしないであらうか。しかしこの派が言語を新しい方面から、即ち美的方面から、生けるがままに伸びるがままに、眼口(一字空白)歴々の現象とし、極めてフレキシブルにして進歩的な視點を供した事は認めなければならぬ。近時亞米利加の人類學者にして言語學者なるセイバアの『言語』の如きは、その序文にも斷つてゐる通り、極めて著しいクローチェの影響を示してゐる。同書百卅一頁「言語はその根口(一字空白)形式に於て人間直觀の象徴的表現である」。我々はロマンティツク派及び美學派に對して、言語に關する全般的觀點を與へられた事を感謝しなければならないが、その方法には飽くまで所謂實證派の確實な態度を參考或は基底としなければならない。

吾人の言語現象が吾人の心的作用と離す事が出来ない限り、言語哲學の問題を心理學

から引はなして考へる事は不可能である。和蘭のギネケンの如きは心理的の觀點を以て言語現象全般解決の鍵とならずとも、實證理想あらゆる見方に對して、より多くの正確さ、より多くの深奥さを附與するものであるとするものもある。現今言語哲學界に於て實質的に最も勢力あるものは、この心理學派であらう。前のロマンティストや美學派の人々の陥つた如く、心理的には不可能なことを他の假定より出發して天降的に言語に要求するが如き弊を避くるにはやはり心理學によらなければならない。言語の實際的研究より出發して「理想主義的」方面に入つた實證派の人々の到達した所も實にこの心理學派の領内であつた。パウル、ヴェゲナー、デルブリュック、シューハルト、ヴァンドリー、メイエ、ドウ・ソツスユール等皆然り。パウルの言語學の心理學□（一字空白）基礎は、すべての心的現象を表象の聯合に依つて説明するヘルバルトの古い聯合心理學である。ここに彼の學說缺點があり、イモーション等の重要な心的要素の言語、とくに文章に及ぼす影響の如きが忘れられてゐる。哲學の方面から出でて、この方面に活躍してゐるのは、「嚴密に學的な内面的經驗」に立脚した哲學を造る核心として心理學を置いたブレンターノの一派である。中でマルティがその最たるものであらう。彼はブレンターノの心理學の分類に従つて、言語を發生的と記述的の二方面より觀察し、前者に於て言語の變轉□（一字空白）相と因をのべ、後者に於て言語要素の用と意味に従へる記述と分類をなしてゐる。彼の説は決して定説ではなく、常に激しい反駁を蒙つてはゐるが、最近のまとまつた心理學□（一字空白）言語觀としては第一に推すべきものであらう。言語が單に話者のみのものならず、同時に聽者を豫想し、聽者の影響作用、話者の顧慮或は理解されん事を求めるアブジヒトの言語に及ぼす作用、更に言語が對者二人をはなれてより大なる一の社會の重要な要素となる事より起る種々の言語現象などを、はじめて正當に認容し研究したのは、心理學的要素が言語學に輸入されてからであつた。従つて言語は心理學を通じてその社學的性質を有する事を認められたのである。最後の傾向は近代佛蘭西の言語學派に多い。北歐のノレーン、イエスペルセンにもこの傾向は著しいものがある。

理論は理論に代替せられ、これらの學說も更に姿を革めて更に完全性に向つて歩を進めるであらう。言語の實證的研究が理想的研究に負ふ所は多い、しかし現今に於ては理想的方面の研究の進歩は遙かに實證的の下にある。且つ實證をはなれては理想的研究も一片の空想である。二つの傾向は常に相倚り相佑けるの關係を失つてはならない。
(完)